

家族の生活の質に関する研究

The Study of Quality of Family Life

中野綾美 (Ayami Nakano)*
宮田留理 (Ruri Miyata)**
野嶋佐由美 (Sayumi Nojima)*

要 約

施設内医療から在宅医療へと移行している今日、家族員の健康問題に伴う“家族の生活の質の低下”という現象が重要な問題となっている。本研究は、ヘルスサービスを活用する様々な家族に対して、家族の生活の質を高める看護を展開する上で役立つ基礎的なデータを得ることを目的に、「家族の生活の質に関する質問紙」を作成し、現代の家族の生活の質に関する実態、およびその特徴を明らかにした。調査用紙は400名に配布し、郵送法により224名から回収された（回収率56%）。データは、SPSS統計プログラムを用いて、基礎統計分析・相関関係の分析を行った。データを分析した結果、家族の生活の質が比較的高く保たれていること、中でも【家族価値】が最も高く、次いで【安寧さ】【円満さ】など情緒的な側面の生活の質が保たれていることがわかった。これに比して、【積極的取り組み】【ゆとり】など、家族が一緒に何かに取り組む側面や【親族関係】【ソーシャルサポート】【社会参加】など、家族を取り巻くネットワークに関わる側面の生活の質が保たれていないという結果を得た。また、ストレスにより影響を受けやすい家族の生活の質の側面が示唆された。

キーワード：家族の生活の質・家族価値・ストレス・家族の健康

I. はじめに

家族員の健康問題は、家族内に様々な影響を及ぼし、家族は生活の過ごし方や家族内の役割を変更せざるをえない状況に置かれる。^{1) 2) 3)} さらに、生活の再構成や役割の調整ができない場合は、家族の生活は脅かされ家族の生活の質は低下することとなる。このような家族員の健康問題に伴って生じる“家族の生活の質の低下”という現象は、施設内医療から在宅医療へと移行している今日、重要な問題となっている。^{4) 5)} 家族の健康の保持増進を第1の目的として家族看護に携わっている看護者が、家族の生活の質を客観的に把握し、家族の生活の質を高めるケアを提供することは、重要な課題である。

生活の質 (QOL) は、1960年代頃より、社会学、経済学、心理学、医学、看護学など多くの学問領域において用いられ、関心がもたれている概念である。^{6) 7)} しかし、多次元的な概念であるため、様々な定義されて用いられている。荻原は、⁸⁾ 生活の質は、個人の安定感、

生活上の満足・不満感、幸福感・不幸福感など、生活者の意識面から捉える立場と、人々の生活を豊かで満足なものにするための社会システムの創造など、社会環境を重視する立場があると論じている。医療の分野では、主として患者個人に焦点を当て、患者の客観的な指標のみならず主観的な指標を用いながら、研究が積み重ねられている。^{9) 10)}

一方、家族の生活は、個人の生活の質の重要な側面として認識されてはきたが、家族の生活の質の概念化や、研究には焦点が当てられていない。1990年代に入り、Jassak(1990)ら¹¹⁾により、家族の生活の質の概念化が試みられている。本研究は、これらの家族の生活の質に関する概念化や、患者の生活の質に関する先行研究を参考にして、「家族の生活の質に関する質問紙」を作成し、これを用いて、現代の家族の生活の質に関する実態、およびその特徴を提示することを目的とした。

本研究は、ヘルスサービスを活用する様々な家族に対して、家族の生活の質を高める看護を展開する上で役立つ基礎的なデータを提

*高知女子大学 看護学科

**元高知女子大学 看護学科

供するであろう。

II. 研究方法

1. 「家族の生活の質に関する質問紙」の作成

研究者らが作成した「家族の生活の質に関する質問紙」は、以下の内容から構成されている。

フェイスシートでは、回答者自身に関する項目・家族員の健康に関する項目・家族が住んでいる環境に関する項目・家族のストレスに関する項目の14項目を設定した。尚、家族のストレスについては、4項目をもうけ5段階・自己記載法により尋ねた。

家族の生活の質については、家族の生活の質を「一家族員が家族の生活に対して持っている主観的指標」として定義し、自己記載法・5段階評価の質問、70項目を設定した。次に、高知県に住む一般市民40名を対象にプレテストを行い、2つの項目得点段階に80%以上の偏りがある項目については、弁別力が弱いと考え修正した。また、質問の内容がわかりにくいとの意見が聞かれた項目についても、再検討した。224名を対象に70項目の質問紙を用いて調査を行い、全項目について因子分析（主因子法；バリマックス回転）を行い、抽出因子は、固有値が1.0以上を基準に、以下の9因子に決定した。

第1因子【積極的取り組み】とは、家族が前向きな姿勢で生活を過ごすことである。第2因子【家族価値】とは、家族に価値を置き、生活を過ごすことである。第3因子【円満さ】とは、穏やかな家族関係を保ちながら生活を過ごすことである。第4因子【親戚関係】とは、親戚との交流を保ちながら生活を過ごすことである。第5因子【安寧さ】とは、家族の中で情緒的な安らぎを得ながら生活することである。第6因子【ソーシャルサポート】とは、家族ぐるみの友人との交流を保ちながら生活を過ごすことである。第7因子【ゆとり】とは、家族で一緒に楽しむ時間を持ちながら生活を過ごすことである。第8因子【社会参加】とは、地域活動や社会活動を通して地域と交流を持ちながら生活を過ごすことである。第9因子【自由性】とは、集団としてのオートノミーを保ちながら生活を過ごすことである。

次に、項目得点と各尺度の得点との相関係数、および項目得点と総合得点との相関係数、各尺度の得点と総合得点との相関係数を分析し、項目分析を行い、41項目が精選された。41項目からなる、「家族の生活の質に関する質問紙」の信頼性と妥当性については、以下の点から検討した。

① 信頼性についての検討

質問紙の信頼性については、Cronbach's α 値による検討、および家族ストレスとの関連により、検討を行った。

各因子ごとのCronbach's α 値は0.701～0.922であり、総合のCronbach's α 値は、0.904であった。また、家族ストレス総合得点と、家族生活の質の総合得点との相関係数は、 $r = -0.520$ ($p < 0.00$) であった。すなわち、家族ストレスが高まるほど、家族の生活の質は低下することが示唆された。

以上のことから、家族の生活の質に関する質問紙は、ある程度信頼性を確保された質問紙であると考ええる。

② 妥当性についての検討

質問紙の妥当性については、家族に関する研究に取り組んでいる研究者5名による、表面妥当性、および因子分析による構成概念妥当性により検討した。

各因子に含まれる項目の因子負荷量は、表1に示す通りであり、累積寄与率は68.96%であった。

各因子の総合得点と、その因子に含まれる項目との相関係数については、表2に示す通りである。

各因子と家族の生活の質の総合得点との相関係数は、 $r = 0.420 \sim 0.890$ ($p < 0.00$) であり、中等度からかなりの相関関係が認められた。しかし、第8因子【社会参加】は、第5・第9因子との間に相関関係が認められず、他の因子との間も弱い相関関係が認められるにとどまったことから、今後さらに検討が必要であると考ええる。

以上のように、因子分析の結果、および、項目-各因子間の相関関係、各因子-総合得点との相関関係から、第8因子に問題を残すものの、ある程度妥当性が確保された質問紙であると言える。

表1 回転後因子負荷量(主因子法:バリマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	固有値	累積寄与率
Q 25	.694									18.279	40.620
Q 9	.680										
Q 33	.662										
Q 10	.610										
Q 15	.568										
Q 8	.527									2.781	46.800
Q 7		.729									
Q 21		.686									
Q 39		.654									
Q 16		.600									
Q 2		.517								1.968	51.174
Q 13		.484									
Q 6		.455									
Q 3			.743								
Q 4			.638								
Q 11			.631							1.638	54.814
Q 34			.584								
Q 17			.454								
Q 30			.442								
Q 23				.753							
Q 19				.700						1.547	58.253
Q 12				.639							
Q 26				.518							
Q 36				.512							
Q 41					.851						
Q 28					.787					1.453	61.482
Q 29					.500						
Q 38					.494						
Q 32					.460						
Q 5						.746					
Q 35						.735				1.252	64.265
Q 37						.718					
Q 31						.401					
Q 22							.776				
Q 40							.767				
Q 1							.437			1.065	66.630
Q 14								.900			
Q 27								.883			
Q 18											
Q 24											
Q 20									.819	1.051	68.966

表2 項目-因子総合得点の総関係係数

	積極的 取り組み	家族 価値	円満 さ	親戚 関係	安寧 さ	サポ ー ト	ゆ と り	社 会 参 加	自 由 性
Q 25	.833								
Q 9	.777								
Q 33	.810								
Q 10	.779								
Q 15	.778								
Q 8	.768								
Q 7		.732							
Q 21		.734							
Q 39		.660							
Q 16		.793							
Q 2		.756							
Q 13		.730							
Q 6		.760							
Q 3			.826						
Q 4			.805						
Q 11			.788						
Q 34			.851						
Q 17			.824						
Q 30			.810						
Q 23				.773					
Q 19				.736					
Q 12				.736					
Q 26				.760					
Q 36				.705					
Q 41					.814				
Q 28					.779				
Q 29					.846				
Q 38					.798				
Q 32					.799				
Q 5						.846			
Q 35						.852			
Q 37						.839			
Q 31						.762			
Q 22							.917		
Q 40							.904		
Q 1							.726		
Q 14								.943	
Q 27								.951	
Q 18									.729
Q 24									.793
Q 20									.727

P<0.00

2. データ収集方法

データは、対象者の居住地に可能な限り偏りが無いよう、大都市、地方の都市、地方の郡部に住む者を対象に、高知県・大阪府・東京都で実施した。研究の目的を説明し、同意の得られた400名に、41項目からなる「家族の生活の質に関する質問紙」配布し、郵送法により回収した。

3. データ分析方法

データは、SPSS統計プログラムを用いて、基礎統計分析、相関関係の分析を行った。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の特徴

調査用紙は224名から回収され、回収率は56.0%であった。対象となった家族の形態は、核家族が66.8%を占めており、ついで拡大家族26.0%、片親家族7.2%であった。家族の住居環境は、住宅地73.8%、農林漁業地14.5%、

その他11.7%であり、居住期間は、10年以上が49.8%を占めていた。

以上、対象とした家族の特徴を総合的にとらえると、核家族で住宅地に住み居住期間も比較的長い家族であると言える。

2. 家族の生活の質の実態

a. 家族の生活の質の総合得点・9つの構成概念の平均得点の比較

家族の生活の質の総合平均得点は、138.99点(得点率69.15%)であった。総合平均得点の得点率が約7割を占めていたことから、本研究で対象とした家族は、生活の質を比較的良好に保つことができていと言えよう。

家族の生活の質の構成概念別に平均得点の得点率を比較すると、【家族価値】が最も高く、得点率77.71%であった(表3参照)。次いで、【安寧さ】74.92%、【円満さ】70.47%、【自由性】66.8%、【積極的取り組み】64.93%、【親戚関係】62.68%、【ゆとり】61.47%、

【ソーシャルサポート】59.8%、【社会参加】52.8%であった。

家族およびに家族生活を重視し価値を置く【家族価値】の得点率が最も高値を示したこと、家族内の関係性や情緒的な側面に関わる【安寧さ】【円満さ】が、7割以上の得点率を占めていたことは、興味深い。項目別平均得点の上位3項目は、「家族は非常に大切だと思う」「家族生活を大切にすることは意義あることだと思う」「常に家族の健康を大切にしている」であり、いずれも【家族価値】に含まれる項目が占めていた。このことから、対象者は、家族に価値を置き、家族生活の中で安寧さを保ち、円満な家族であると認識していることがわかる。また、【親族関係】は、約6割にとどまっていることを考えあわせると、我が国の伝統的な家族主義が根強く現代の家族にも流れてはいるが、親族との関係は、昔とは異なり、距離のあるものとなっていると言えよう。

家族は、【積極的な取り組み】や【ゆとり】を持つことのできていた家族は、6割にとどまっていることから、現代の家族にとって、家族の生活の中でゆとりを持つ生活を過ごすことの難しさが伺える。【ソーシャルサポート】の平均得点の得点率は約6割、【社会参加】は、約5割にとどまった。項目別平均得点の下位3項目は、いずれも【社会参加】【ソーシャルサポート】に含まれる項目であったことから、家族の生活の質の、家族を取り巻く社会との交流の側面は、得点率が低い傾向があると言えよう。

b. 項目別にみた家族の生活の質の実態

家族の生活の質を形作る9つの構成概念について、各々に含まれている項目の度数分析を行い、家族の生活の質の実態を捉えることとする。

① 家族価値

項目「家族は非常に大切だと思う」は、145名(65.0%)が、全くそうであると回答しており、対象者の約7割が、家族を非常に大切であると認識していることがわかった。同様に、「家族生活を大切にすることは意義あることだと思う」は、あまりそう思わない・全くそう思わないと回答した者は、2名(0.9%)であり、ほぼ全ての対象者が家族生活を大切にすることは意義があると認識していることがわかった。しかし、全くそうであると回答した者は104名(46.6%)にとどまったことから、家族を非常に大切であると認識している家族に比べ、家族生活を大切にすることを非常に重要であると認識している家族は、約2割程度少ないことがわかる。

「常に家族の健康を大切にしている」「家族はいつも見守ってくれている」「家族と過ごすことにより充足感を得ることができる」は、9割以上の家族がそうであると回答しており、健康および情緒的な側面に価値を置いていることがわかった。

「どんな時もわが家らしさを大切にしてきたと思う」「家族としてのほこりをいつも持っている」は、全くそうであると回答した者は、各々40名(18.0%)、41名(18.3%)に止まったものの、かなりそうである・まあまあそう

表3 家族の生活の質の平均得点の得点率

	項目数	得点範囲	平均得点	平均得点得点率
家族価値	7項目	7 - 35点	27.20点	77.71%
安寧さ	5項目	5 - 25点	18.73点	74.92%
円満さ	6項目	6 - 30点	21.14点	70.40%
自由性	3項目	3 - 15点	10.02点	66.80%
積極的取り組み	6項目	6 - 30点	19.48点	64.93%
親戚関係	5項目	5 - 25点	15.67点	62.68%
ゆとり	3項目	3 - 15点	9.22点	61.47%
ソーシャルサポート	4項目	4 - 20点	11.96点	59.80%
社会参加	2項目	2 - 10点	5.28点	52.80%
総合得点	41項目	41 - 205点	138.99点	67.80%

であると回答したものと合わせると約8割から9割を占めていた。

② 安 寧 さ

項目「この家族に生まれてよかったと思う」は、63名(28.9%)の家族が全くそうであると回答しており、かなりそう思うと回答した家族とあわせると、約5割の家族が占めていた。「毎日の家族生活は楽しい」「わが家は、とても円満である」は、いずれも約9割の家族が、そうであると回答していた。従って、大部分の家族は、家族関係が円満で、家族生活の中に楽しみを見いだしていると言える。「家族のことを考えると憂鬱になる」については、42名(18.8%)が、そうであると回答していた。これらのことから、家族のことを考えると憂鬱になる場合もあるが、その中で、家族の生活の中に安寧さを見いだしていることが示唆された。

③ 円 満 さ

項目「周囲の人々から仲のよい家族だと思われる」は、144名(64.6%)が全くそうである・かなりそうであると回答していた。「わが家は、暖かい雰囲気である」「私たち家族は、わが家らしさを育てている」について、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、いずれも5割以上を占めていた。以上のことから、約5割の家族が、仲のよい暖かい家族であり、わが家らしさを育てることがわかった。しかし、「お互いによく助け合う家族である」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、74名(33.3%)にとどまり、120名(54.1%)が、まあまあそうであるに集中していたことから、家族員同士の助け合いは、中程度にとどまっていることがわかった。

④ 自 由 性

項目「まわりに左右されずにわが家の方針を大切にしている」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、97名(43.3%)であった。まあまあそうであると回答した家族を含めると200名(89.3%)と、約9割を占めていた。「わが家には自由な雰囲気がある」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、105名(46.9%)であり、約5割を占めていた。

まあまあそうであると回答した家族と合わせると、196名(87.5%)と、約9割を占めていた。一方、「わが家はそれぞれ自由に決断している」については、全くそうである・かなりそうであるとした家族は70名(31.4%)であり、まあまあそうであると回答した家族を含めると、162名(72.7%)を占めていた。

以上のことから、約9割の家族が、自由な雰囲気を保ちながら、まわりに左右されず家族の方針を大切にすることができていることが示唆された。また、家族員各々の自由性についても、約7割の家族が保つことができていることがわかる。

⑤ 積極的取り組み

項目「問題を生じたときは、解決に向けて積極的に取り組んでいる」について、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、113名(48.8%)であり、まあまあそうであると回答した家族を含めると208名(91.4%)と、約9割の家族が占めていた。これらのことから、9割以上の家族が、何か問題が生じた状況に置いては、問題解決に向けて、積極的な取り組みをしていることがわかった。

「将来のことを考えながら、今の私たち家族について話し合っている」「家族生活を豊かにするためにいろいろ工夫している」については、いずれも、そうであると回答した家族は、約8割を占めていた。すなわち、家族は、現在の家族の生活を豊かにするために積極的な取り組みをしていると言えよう。一方、「わが家の理想に向かって家族で努力している」「一致団結して家族の目標に向かっていく」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、各々59名(26.4%)、46名(20.6%)、まあまあそうであると回答した家族を含めると、各162名(72.6%)、142名(63.6%)であった。従って、理想や目的に向かって家族が積極的に取り組む側面は、やや弱い傾向があることが示唆された。

⑥ 親 戚 関 係

項目「わが家は、親戚と行き来が盛んである」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、73名(32.6%)であった。まあまあそうであると回答した家族を含めると164名(73.2%)と、7割以上を

占めていた。親戚との行き来は、現代においても依然保たれており、我が国の伝統的な親族関係が現在も続いていると言えよう。「困った問題が起きたとき、親戚はいろいろと助言してくれる」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、62名(27.6%)であり、まあまあそうであると回答した家族を含めると148名(66.0%)の家族が、困った問題が起きたとき、親戚の助言があると回答していた。「わが家は、親戚と助け合いながら生活している」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、51名(22.8%)であり、まあまあそうであると回答した家族を含めると145名(65.0%)であった。先に述べた、親戚との行き来が盛んな家族が7割以上を占めていたのに対して、困った問題が生じた時の助言や、助け合いをしている家族が少ないことから、親戚との交流はあるものの、家族は家族として独立している関係であることが示唆された。「親戚は、われわれ家族の自由を認めてくれる」「親戚は、わが家の価値観や考えを尊重してくれる」について、いずれも8割以上の家族がそうであると回答していることから、家族と親戚との関係は、家族の自由や価値観を尊重してもらえる関係であり、親戚との交流は保っているが、距離を保った関係を維持していることが示唆された。

⑦ ゆ と り

項目「わが家は、活動的な家族である」については、まあまあそうであると回答した家族が105名(46.9%)であり、全くそうである・かなりそうであると回答した家族を含めると、176名(78.6%)を占めていた。「家族で余暇をいつも楽しんでいる」については、全くそうである・かなりそうであるとした家族は74名(33.1%)であり、まあまあそうであると回答した家族を含めると、160世帯(71.5%)であった。また、「休みには、家族でレクリエーションを楽しんでいる」については、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、62名(27.8%)であった。まあまあそうであると回答した家族を含めても143名(64.1%)にとどまった。

以上のことから、約8割近い家族がゆとり

を保っていることがわかった。しかし、家族で余暇を楽しんだり、レクリエーションを楽しんでいる家族は、6割から7割と低い傾向が認められた。

⑧ ソーシャルサポート

項目「わが家は、家族ぐるみの友人と行き来が盛んである」については、あまりそうでないと回答した家族は90名(40.7%)、全くそうでない23名(10.4%)であった。約5割の家族は、家族ぐるみの友人との交流を盛んに行っていなかった。「家族ぐるみの友人は、わが家の価値観や考えを尊重してくれる」について、全くそうである・かなりそうであると回答した家族は、91名(41.6%)であった。まあまあそうであると回答した家族を含めると194名(88.6%)であり、約9割近い家族が、家族ぐるみの友人と価値観や考えを尊重してくれる関係を得ていた。「家族ぐるみの友人は、困った問題が起きたとき助言してくれる」については、全くそうであると回答した家族は16名(7.3%)、かなりそうである19名(8.6%)であり、まあまあそうであると回答した家族を含めると169名(76.8%)を占めていた。「家族ぐるみの友人とは、日常何かにつけて助け合っている」については、142名(64%)がそうであると回答していたことと考え合わせると、家族ぐるみの友人は、何か問題が生じた時などの大切な資源であることが示唆された。

以上のことから、家族は、家族の価値観を尊重し、困ったときに助言してくれる友人を有しているが、必ずしも日常的交流が盛んなわけではないことがわかった。

⑨ 社会参加

項目「わが家は地域での活動に積極的に参加している」については、あまりそうでないと回答した家族が76名(34.1%)、全くそうでない18名(8.1%)であり、約4割の家族は、積極的に地域での活動に参加していなかった。「わが家は地域で開催されている催し物や社会活動に積極的に参加している」についても、同様に、あまりそうでないと回答した家族は95名(42.6%)、全くそうでないと回答した家族は、32名(14.3%)であり、約6割の家族は、地域での社会活動に積極的に参加してい

ないことが明らかになった。

以上のことから、家族の積極的な社会参加は、低い傾向が認められた。

4. 家族のストレスと家族の生活の質との関連

家族のストレスの総合得点と家族の生活の質の総合得点は、 $r = -0.520$ ($P < 0.00$)であり、中等度の相関関係が認められた。すなわち、家族のストレスが高いほど家族の生活の質は低下していた。家族のストレスと各因子との関係を見ると、【安寧さ】との間に $r = -0.726$ ($P < 0.00$) とかなりの相関関係が認められた。【円満さ】 $r = -0.460$ ($P < 0.00$)、【ゆとり】 $r = -0.433$ ($P < 0.00$)であり、中等度の相関関係が認められた。【家族価値】 $r = -0.395$ ($P < 0.00$)、【積極的取り組み】 $r = -0.352$ ($P < 0.00$)、【自由性】 $r = -0.352$ ($P < 0.00$)、【親戚関係】 $r = -0.329$ ($P < 0.00$)、【ソーシャルサポート】 $r = -0.307$ ($P < 0.00$)であり、弱い相関関係が認められた。【社会参加】 $r = -0.155$ ($P < 0.00$)については、相関関係が認められなかった(表4参照)。

以上のことから、家族のストレスが高まることにより、家族の生活の質は低下することが明らかになった。さらに、家族のストレスは、家族の生活の質の側面の中でも、特に安寧に最も影響を与えることが示唆された。次いで、円満さやゆとり・楽しみに影響していることが示唆された。社会参加については、家族ストレスとの間に相関関係は認められなかった。社会参加は、平均得点が最も低く、家族のストレスの程度に関わらず、実施されていないと言えよう。

IV. 考 察

本研究結果から、家族の生活の質の実態が

明らかになった。ここでは、まず、家族の生活の実態にみられる特徴について考察する。次に、ストレスと家族の生活の質との関連から、ストレスが家族の生活の質に及ぼす影響について検討する。

1. 家族の生活の質にみられる特徴

現代の家族の生活の質は、以下のような特徴を有していると考えられる。

第1に、比較的家族の生活の質は、保たれている傾向が認められたことがあげられよう。この点については、本研究結果を一般化するには限界がある。しかし、家族の脆弱性が指摘され、離婚率の増加¹²⁾、親子関係の問題、家族崩壊など、家族に関する様々な問題がクローズアップされている今日¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、本研究結果は、現代の家族の健康な一側面を提示していると言えよう。

第2に、伝統的な家族主義を反映しているという点が上げられよう。これは、家族や家族生活を重視し価値を置く【家族価値】が最も高得点を示したことに表れている。小此木は、¹⁶⁾我が国の現代の家族の特徴をとらえ“ホテル家族”として概念化している。すなわち、日本人にとって家族は従来の意味を失い、器として存在している(ホテル家族)と論じている。関井も(1997)¹⁷⁾、現代の家族の実態と動向を分析し、個人主義が家族領域に浸透する、個人化現象が生じていると指摘している。しかし、本研究から、伝統的な家族主義は、今も尚根強く残っていることが示唆された。伝統的な家族主義とホテル家族、あるいは家族の個人化現象という一見相反する現象が、複合的に現れていることが示唆された。

第3に、地域ネットワークは脆弱化し、家族の生活と地域社会とのつながりが希薄になっ

表4 ストレス総合得点と家族の生活の質の相関係数

	積極的 取り組み	家族価値	円満さ	親戚関係	安寧さ	ソーシャル サポート	ゆとり	社会参加	自由性	総合得点
ストレス 総合得点	-0.352**	-0.395**	-0.460**	-0.329**	-0.726**	-0.307**	-0.433**	-0.155*	-0.352**	-0.520**

** $P < 0.00$

* $P < 0.05$

ていることである。これは、【社会参加】が他に比べて著しく低い得点を示したことに表れている。澤井は(1994)¹⁸⁾、家族と社会との相互関係が現代社会では維持できなくなっていると論じている。国際家族年の理念において、社会は、家族が地域の中で家族としての責任を果たせるように、家族にできるだけ保護と援助を与えることがうたわれているが、家族の健康に携わる専門職として、看護師は、家族の生活の質の社会参加の側面に働きかける必要がある。

第4に、情緒的な側面の得点が高いことである。これは、【安寧さ】【円満さ】が高い得点を示していたことに表れている。Feiedman(1986)¹⁹⁾は、家族は、温かい情緒や愛情を得ることができる避難所として重要な意味を持つと論じている。家族危機や家族の情緒的な絆の弱さがマスコミなどで取り上げられ指摘されているが、本研究の対象となった家族は、家族生活を営む中で情緒的な支援を受け、安らぎや保護を得ることができていると考える。

第5に、先に述べた情緒的な側面に比べ、家族が一緒に何かに取り組んでいく側面の得点が低いことである。これは、家族が問題や目標に向かって前向きに取り組んだり工夫をして生活していく【積極的取り組み】や、一緒に楽しい時間を生み出していく【ゆとり】の得点が6割にとどまったことに表れている。家族の生活の質を高める上で、家族の対処能力を高める援助や創造力を育む援助が必要であると考える。

第6に、親戚ネットワークやソーシャルサポートが家族にとって一定の距離感のあるものとなっていることである。すなわち、家族は、親戚や家族ぐるみの友人との間に交流はあるものの、相互扶助の関係が弱まっている。庄司は(1990)²⁰⁾、家族機能の一般的な低下に伴い、外部社会からの積極的な援助を必要としている現代の家族にとって、常に外部社会と一定の融和性を保ち、外部社会との交換関係を保つことが重要であると論じている。従って、家族の生活の質を高める上で、家族の有している親族ネットワークやソーシャルサポートを活性化するとともに、専門職による家族サポートシステムを強めていく必要があると

考える。

2. ストレスが家族の生活の質に及ぼす影響

本研究結果から、ストレスが高くなるほど家族の生活の質は低下することが示された。さらに、家族の生活の質の構成要素の中でも、【安寧さ】【円満さ】【ゆとり】がストレスの影響をかなり受けており、次いで、家族価値、自由性、親戚関係、ソーシャルサポートに影響していた。ストレスにより影響を受けやすい生活の質の側面が抽出されたことは、興味深い。ストレス状況に家族が置かれている場合、看護師は、生活の質の側面の中でも、【安寧さ】【円満さ】【ゆとり】について、問題が生じる可能性を予測しながら注意深くアセスメントする必要がある。さらに、家族の生活の【安寧さ】【円満さ】を保つことができるよう、家族関係を調整するアプローチや、【ゆとり】を持つことができるよう、生活の再構成へのアプローチや現状に対する家族の認知を変化させる働きかけや、ゆとりを生み出す創造力を育む援助を行う必要があると考える。今後、家族への援助方法を開発し、家族の生活の質のこれらの側面にターゲットを絞って援助し、第2段階として、【家族価値】【自由性】【親戚関係】【ソーシャルサポート】についてもアセスメントし、必要に応じて調整していく必要がある。

V. おわりに

家族の生活の質について実態調査を行い、家族の生活の質が比較的高く保たれていること、中でも【家族価値】が最も高く、次いで【安寧さ】【円満さ】など情緒的な側面の生活の質が保たれていることがわかった。これに比して、【積極的取り組み】【ゆとり】など、家族が一緒に何かに取り組む側面や【親戚関係】【ソーシャルサポート】【社会参加】など、家族を取り巻くネットワークに関わる側面の生活の質が保たれていないという結果を得た。特に、ストレスにより、家族の生活の質の【安寧さ】【円満さ】【ゆとり】が最も影響を受けやすく、次いで、【家族価値】【自由性】【親戚関係】【ソーシャルサポート】が影響を受けやすい領域であることが示唆された。家族看護を展開する上で、家族の

生活の質のこのような特徴を考慮して、援助方法を確立していく必要がある。

文 献

- 1) 荒川靖子, 佐藤禮子: 終末期患者の家族に対する看護—家族ダイナミクスへの看護介入のありかた, 看護研究, 22(4), 323-341, 1989.
- 2) 中野綾美: 看護はなぜ家族を一単位として考えるのか, 小児看護, 16(4), 410-414, 1993.
- 3) 大島 巖: 慢性疾患患者・障害者の家族, 保健の社会学, 177-191, 1993.
- 4) 石井享子: 地域看護に活用する家族看護学, Quality Nursing, 3(4), 31-314, 1997.
- 5) 関井友子: 家族をとらえる視点—現代家族の実態と動向, 看護学雑誌, 61(1), 48-52, 1997.
- 6) 中里克治: 心理学からのQOLへのアプローチ, 看護研究, 25(3), 193-201, 1992.
- 7) 萩原 勝: 日本人のクオリティ・オブ・ライフ, 至誠堂, 1978.
- 8) 前掲7).
- 9) Burckhardt, C. S., Woods, S. L., 黒田裕子監訳: 慢性疾患を持つ成人のクオリティ・オブ・ライフ精神測定学研究, 看護研究, 25(3), 203-211, 1992.
- 10) 筒井真優美: 看護学におけるQOL概念と測定, 看護研究, 25(2), 153-156, 1992.
- 11) Jassak, PF: Quality of Family Life—exploration of a concept, Seminars in Oncology Nursing, 6(4), 298-302, 1990.
- 12) 下夷美幸: 離婚と子供の監護—子の福祉の視点から, 看護研究, 22(2), 137-148, 1989.
- 13) 松原治郎: 問われる家族の存在意義, 現代のエスプリ, 7-15, 1982.
- 14) 高橋勇悦: 家族は不滅か, 現代のエスプリ, 222-240, 1982.
- 15) 新田 慶: 現代社会における家族, 小児看護, 18(6), 755-762, 1995.
- 16) 小此木啓吾: 家庭のない家族の時代, 筑摩学芸文庫.
- 17) 関井友子: 家族をとらえる視点—現代家族の実態と動向, 看護学雑誌, 61(1), 48-52, 1997.
- 18) 澤井セイ子: 国際家族年の意義と問題点, 教育と医学, 614-620, 1994.
- 19) Fridman, M. M., 野嶋佐由美監訳: 家族看護学, 260-261, へるす出版, 1993.
- 20) 庄司洋子: 現代日本の家族, 現代のエスプリ, 42-50, 1990.